

立儲の嘉儀

今上陛下、先帝の丕業を紹ぎ給ひ、竝に即位の大典を舉げ給ひしが、復、典禮に遵ひ、去秋十一月三日の佳辰を卜して、皇太子册立の盛儀を行はせ給へり。

此日秋晴、天光熙々、東宮殿下早良高輪御殿より御參内あらせられ、賢所皇靈殿神職奉告の儀、賢所大前の儀あり、天皇陛下親しく皇祖の神靈に告げさせ給ひ、靈切御劔を親授し給ふ、次で三殿親謁の儀朝見式等の嘉禮何れも日出度終らせられて入御還啓あり、月の一日勅使を發し給ひ、此日神宮、神武天皇敬傍山陵、明治天皇伏見桃山陵に奉幣の儀あり。曠古聖代の盛典、昇平瑞祥の間に行はせられ、皇運の隆盛と國家の昌榮とを奉祝し得たりとは、天人共に歡喜するところなり。

懷德堂の開堂と講演開始

懷德堂は、播磨人中井發菴が、享保九年大阪の商人中村睦峰（三星屋武右衛門）富永芳春（道明寺屋吉左衛門）長崎克之（船橋屋四郎右衛門）吉田益枝（備前屋吉兵衛・山中宗古・鴻池又四郎）等と密謀りて、同志を糾合し、三宅石菴（最初の學主）を聘して、尼ヶ崎

町二丁目北側（今其の跡は今橋通四丁目北側に創立せしより、同十一年、幕府の官許を得て、大坂學問所と稱せられ、石菴歿後は其の子春樓及び發菴相踵ぎて其學主となり、此の間五井闡洲教鞭を執ること前後二十年、尋で發菴の二子竹山（懷德堂主）履軒（水哉館主）崛起して、大阪の文學海内に著はる、竹山の子蕉園、碩果、履軒の孫桐園、及び竹山の外孫重河寒泉等相踵ぎて儒業を守りしも、明治維新の際世態一變し、同二年を以て廢學の已むなきに至りしが、同四十三年一月十九日大阪府立圖書館樓上に開きし大阪人文會の席上、西村天因氏の、懷德堂教授たりし五井闡洲傳の講演を聴きたる後、斯堂百四十餘年間の文教は、實に大阪の發達に資すること大なれば、宜しく此の師儒諸先生の爲に公祭を執行すべしとの議出で、忽ち全會一致を以て議決せられたり、乃ち同年九月懷德堂記念會なるものを創立し、男爵佐友吉左衛門氏を會頭に推戴し、公祭寄金の募集に着手し、遂に翌四十四年十月五日（十月五日は幕府の官許を得て開講せる記念日なり）を下して、大阪市公會堂に同祭典を執行し、次で記念講演會（二日間）遺物展覽會（五日間）を開き、且つ懷德堂遺書十五冊の記念刊行物を頒與したり、翌年三月此の公祭に有志者よりの贈金の剩餘金の基本金とし、更に有志の義金を仰ぎ、新に懷德堂記念會を創設し、財團法人組織となさんとの議を決し、遂に大正二年六月發起人會を開

きて、密附行爲案を議決し、理事者五名(現今永田仁助、西村時彦、今井貫一、小倉正恒、廣岡惠三の五氏)評議員三十名(現今大久保大阪府知事以下二十一名)を推薦し、次で法律上の手續を了して、茲に現在の記念會を創立するに至れり、事天聽に達し、大正三年三月五日金二百圓を下賜せられたり、翌四年六月十二日講堂敷地として、府立大阪博物館構内三百六十一坪の無償使用の許可を得、遂に昨年二月起工、同九月竣工せり、建坪は講堂百三十三坪二合五勺にして、間口九間奥行十二間半、事務所二階建十四坪七合五勺、附屬舍十一坪五合、合計百五十九坪五合、建築様式は洋風を加味せる白木造にして、講堂は祠堂の制に倣へり、是に於て十月十五日午前九時半を以て開堂式を舉行せり、朝野の名士約二百五十名參會あり、此日午前は懷德堂師儒諸先生神位を安置して祭典を行ひ、藤澤南岳翁の教育勸語捧讀、中庸首章性道教に就きての講義あり、午後記念講演會を開き、懷德堂の由來と將來(本會理事西村時彦氏)文化史上に於ける懷德堂の功績(東京帝國大學文科大學教授文學博士森野由之氏)懷德堂の開堂を賀す(京都帝國大學總長醫學博士荒木實三郎氏)の講演あり、將來に於ける本會の事業は、(一)學術講演會を開くこと、(二)講演集及び其他圖書の編纂出版をなすこと、(三)大阪先賢の事蹟及著書を調査表彰すること、(四)獎學金を支出して學術の研究を奨励すること、

とす、而して學術講演としては、第一に定期講演、定日講義を開始するに定め、定期講演は毎月第一、第三の土曜日午後七時開講、同九時終講の事とせり、講師は京都帝國大學文科大學の各教授にして、毎回二教授出講せられ、講義は各一時間なり、數回繼續して一演題を講了せらるべく、該講義筆記は、印行の豫定なり。應講者に對しては、應講者名簿に住所職業氏名を自署せしむるのみ、學力の如何を問はず、應講隨意なり、去る十一月四日第一回を、同月十九日第二回を開けり、第一回は三百五十一名、第二回は三百十六名の應講者ありて、豫想以上の盛況を極めたり、講師並に演題左の如し、

孟子概説

文學博士 狩野直喜氏

國史新話

文學博士 三浦周行氏

定日講義は定期講演と共に開くべき豫定なりしが、専任教授の本だ定まらざりと爲め、未だ開講の運に至らず、然れども廣島高等師範學校教授文學士松田直藏氏を聘するに決したれば、本年一月より同講義を開始するに至るべし、(懷德堂内吉田銳雄氏報)

嵯峨本展覽會

多年嵯峨本の蒐集に努め、最近その研究の結果として「嵯峨本考」を公にしたる和田維四郎氏は、過般所藏の嵯峨本全部を携へて入洛し、新村博士其他好書家の贊同を得て、昨年十月二十二日落東

知恩院前なる久原房之助氏別荘に於て、展覽會を開催せり。嵯峨本は慶長年間山城國嵯峨の素封角倉素庵の私版に係り、その紙質の真好、印刷の鮮明、裝潢の優美なる點に於て、他に比類なき佳本にして、世人の翫賞太甚しきに拘らず、現今極めて罕觀にし、風考説未だ精ならず、名稱も或は光悅本或は嵯峨本と云ひ、其區別明かならざりしが、和田氏は其蒐集本より詳に異同を比較考證し（第一）光悅自ら稿本を自書して印行し同人獨特の意匠に成れる優美なる裝潢を施せるものを光悅本とし、（第二）角倉素庵がその體裁を光悅本に倣ひて刊行し又自己の創意により専ら實用を主として刊行せるものを嵯峨本とし、（第三）他人が光悅本又は嵯峨本に倣ひて出版せるものを類似本とし、此三種の分類に依り陳列せられたり。當日の出品には和田氏の蒐集及び京都帝國大學所藏を始め、京阪の藏書家數氏の出品を合せて總數百餘點あり、觀世流諸本、久世舞、百人一首、扇の草紙、歌仙、伊勢物語、同育開抄、徒然草、源氏物語、方丈記等其他從來嵯峨本若くは光悅本と稱せられたるものは殆どその全部を網羅し、嵯峨本類似本の多數及び光悅、素庵自筆の墨蹟等あり。蓋し嵯峨本類の斯く多數出版せられしは古刻史の研究に資する所大なり。（山鹿誠之助氏報）

第二回大藏會

御大典の際奉祝として第一回大藏會を開催したりし京都佛教各宗

學校聯合會は昨年又十一月三四兩日其の第二回を開催し、第一日は六條會館に於て講演會を開き、大藏會所感、天竺拙山氏、大藏經に就て（文學博士松本又三郎氏、大藏經に就て（齋藤唯信氏）の講演あり、第二日は佛教大學に於て大藏經の陳列會を行ひ、一般有志の縱覽に供せり。陳列品は之を震翰其他、大藏經版本、單行版本、寫經、栢本其他、梵藏諸文經典類の六門に大別し、更に幾多の細別をなせり。すべて三百四十點。何れも精選を経たるものなりしが、就中、注意に上りしは、第二門中に於て宋朝翻版佛本行集經卷第十九、元朝杭州普寧寺版にして「攝州兵庫下庄帝釋神撫山禪昌寺常住」の朱印ある般若經、高麗初版にして同朱印ある大方廣如來不思議境界經以下、天龍寺版にして臨安・嘉慶・明德等の年紀ある大方廣佛華嚴經合論數卷、法苑珠林卷第廿八、天海版一切經新刊印行目錄、第三門に於ては、元豐八年九月蘇東坡の跋ある宋版楞伽經、平安朝版にして「釋源空」を表紙に墨書ある法華玄義秘藏、鎌倉時代嘉祿版大般若經、第四門にありては六朝時代に敦煌出土の大般涅槃經第八、唐朝時代永淳二年三月吳書の妙法蓮華經世音經、奈良朝期のものに天平十二年五月一日光明后御筆大乘離文字普光明藏經、「法隆寺一切經」の黒印ある天平寶字六年の奥書ある長阿含十報法經下、第五門に於ては文永三年の銘ある勝鬘經版、第六門にありては都賀羅語文書、滿文彌勒願文、滿文

大般若經等なりき。

坂本中岡兩志士五十年祭

昨年十月十五日は、幕末王事に奔走せし土州藩坂本龍馬、中岡慎太郎の兩志士が京都市河原町の寓居に於て兎及に斃れてより五十年の當日なるを以て、土州出身者の發起により、祭典・遺品陳列及記念講演會を行ひたり、祭典は同日上午洛東靈山の兩志士墓側に於て舉げ、陳列は山麓高台寺方丈に於てし、兩志士の遺囑遺品及び兩志士に關係ある名士の筆蹟等の出陳あり、其中、兩志士寫眞、遭難當時の佩刀、同じく遭難時、床上におりて血滴を受けし襦褌、海援隊秘記、下關海戰圖、坂本龍馬出郷の際老父より與へられし修業心得大意、寺田屋遭難の顛末を報せる書翰、紋服、海援隊陸援隊使用の鐵砲等衆目を惹けり。講演會は同夜三條青年會館に於て岩崎英重氏、岡先生に就て「土方久元伯」維新實歷談「中原邦平氏」「薩長同盟」岡部精一氏「坂本先生と大政返上」の講演ありたり。

若狹國脇袋西塚の發掘

若狹國遠敷郡瓜生村大字脇袋に數個の古墳あり。其の其の内容俗に西塚と稱する墳古は、昨年同地鐵道工事の際土砂を採取して、封土の一部に墓墳の側石を露出するに至りしを以て、一時採掘を止められたるが、去る十月十二日の兩日に亘り福井縣廳より々佐木

事宜出張して、上田同縣師範學校教諭立會の上に此の墳の内部を調査し、種々の注意すべき遺物を發見せり。今同地村役場の報する所に依りその概要を記さんに、脇袋村は東に山を貧ひ西に開ける所に依りその概要を記さんに、脇袋村は東に山を貧ひ西に開ける地勢にて、前面北川の流域を望むべき形勝の位置にあり。西塚は此の村落の西に接せる字野田なる田中に設けられたるものに、東方字霜ノ下なる上ノ塚と稱する一大古墳と相對し附近古墳の中心をなせり。南面せる前方後圓墳にして前後の徑二十九間前方の幅十七間同高一丈四尺あり。後圓部の徑・高さ畧前方部のそれに等しく、封土は三段に築かれ、埴輪圓筒を繞らせり。工事の際には前方部より封土を採掘し後圓の畧中央に至り墓墳に掘り當てしにて、墳は此の墳の方向に直角の方向を取り、西向に開口せる横穴式のもの、如く、玄室の長約十二尺、幅六尺五寸高約四尺あり。底部は礫石を敷き、側壁は大小の石を以て積みなされ天井石四枚を以て之を覆ひ、内壁には一面に朱を塗抹し、天井石の上部には粘土層ありしと云ふ。

内部に於ける遺物の排列は、先づ玄室の東南隅に甲冑、刀身等あり。その北方。室の奥壁に近く小鏡一面、管玉等を置き、これ以前者の附近及び玄室の中央に亘り鈴、小玉類、裝飾具等を發見し更に室の前方中央より漢式鏡一面、馬具類、刀身、鏃等あり。其の鏡は背面を上にして置かれたるにて、鏡面には朱塊附着し木片

も少許存せり。而して骨は全くなかりしと云ふ、是等の發掘の品目は、漢式鏡二面、勾玉一個、管玉八個、小玉數十個、金銅製裝飾具二個、兜二個、鎧二領分、直刀身數本、鐵鏃一束、鎗數个、斧一個、鈴九個、轡ノ鏡板二個、雲珠二個、革金具殘缺とも十數個、三角形砥石(?)一個、赤土器破片二個、甕瓦破片一個、朱塊一個にして、即裝飾具、武具、馬具等各種に亘れり。たゞ土器は頗る少し。未だ曠の羨道の部分を發掘せずと云へば、此の部に埋没せるやも知るべからず。是等の遺物中注意すべきは鏡及び裝飾具の類なり。鏡二面の内大なるは人物畫象鏡と呼ばるゝものにして徑六寸五分五厘、縁の厚三分あり、内區は四個の四葉座孔を以て四分されこれに一種の技藝を演ぜる十一軀の人物を現し、其の圖樣漢代の畫象石に類似せるを見る。銘帶は内區に接して、

尙方作竟自有紀、辟去不羊宜古市、上有東王父西王母、令君陽逃多孫子兮

の銘あり。外區の唐草を配せる獸帶また特殊のものなり。是等文様、手法より見ればその製作は恐らく支那六朝東晉若くはその以前なりと考へらる。蓋し當時多く舶載されしものなり。鏡の二は徑四寸一分五厘のものなり。破碎せるが内區の紋様は四獸なるが如し。粗なる線より成り手法拙に、或は邦人の手に成りしかと思はる。裝飾具として擧ぐべきは純金製と傳ふるハート形の小金

具にて、長徑一寸二分、短徑九分あり。中央に徑一分五厘の綠色の寶石を挿入せり。肥後國玉名郡江田村大字江田の古墳出土の有名な耳鎖の末端に附せる金具に類似せるを以て、蓋し同一の目的に使用されしものか。其の二は帶金具の類にして、長方形の小區劃内に龍の文様を透彫せし、その裏面に同製の板を附す。その一には鉸具の一部分存せるあり。是等の鏡又は文様に現れたる龍よりして古墳營造の年代を推定する事を得ん。其他の遺物また一々特徴あり。殊に是等が古墳内より發見されて、從來の多くの例に反し充分學術的の調査を経たる事は、一層其の價值を加ふるものなり。〔梅原〕

史學研究會

例會 大正五年十月廿一日午後一時より文科大學第九教室に於て、左の講演ありたり

古ゲルマンの集團「フンタルト、シヤフト」に就いて

文學士 植村清之助君

日本に於ける西洋藝術の源流

文學博士 新村 出君

右の講演は何れも本號に掲載するところなり

總會 大正五年十一月廿六日午後一時より京都帝國大學學生集會

場にて第九回總會を開く、原博士の庶務會計の報告の後評議員改選あり。原勝郎、濱田耕作、小川琢治、内藤虎次郎、内田銀藏、桑原隲藏、矢野仁一、坂口昂、喜田貞吉、三浦周行(いろは順)の諸氏當選せしも、内田、喜田兩氏及び次點者富岡謙藏氏は何れも都合に依り辭任せられたるを以て、次點者今西龍、羽田亨の二氏就任せり。

右終つて講演に移り、左の講演あり。

エト、スキの遺跡、其の文化、
希臘人の世界觀と中世人の世界觀、
朝永博士 朝永三十郎君

濱田學士の講演は本號に掲載するを以て朝永博士の講演梗概を左に記載せん。

「希臘人の世界觀と中世人の世界觀」といふ題目は講演の内容に對して稍廣汎に失する。之を改めて「希臘哲學の世界觀と敎父哲學の世界觀」とすれば更に内容に適切であらう。此演題を選んだ理由は、言は、for want of a better であるが、併し若し其他に多少の理由があるをすれば、第一に、哲學と實際生活との間には密接な關係があるといふことを豫想して希臘哲學の世界觀と大体上中世思想の基礎となつて居る敎父の世界觀との比較が此時期の普通の歴史の研究に何等かの背景を供給しはせ

ぬかと考へたこと、第二に、此事が同時に歴史哲學の濫觴を説くことになるといふことである。

希臘哲學のせし世界觀は吾々が今問題とせんとする視點よりして之を三種に分類することが出来る。(一)自然中心的、(二)人間中心觀、(三)人間中心を自然中心に從屬せしめたもの、これである。第一は「ソフィスト」以前の自然哲學期の思想、第二は「ソフィスト」「ソークラテース、プラトーン」、第三は「アリストテレース」「ストア」説、新プラトーン説等に依て代表せらる。併しその人間中心的といふものも、主として關係の中心に依て命名さるゝもので、世界觀の内容其者が徹底して人間中心であるものは殆んどない。まして人間の歴史を全体として見て、其意義其最後の歸趣發展の徑路等を考へるといふことは希臘哲學に於ては全然なかつた。希臘哲學の中心概念は大体上より言つて、人間又は歴史に非ずして永遠の、自然の過程のことである。然るに基督教は其出發點よりして全然人間中心である。基督教によれば神は人間を中心として其造化の業を営み又た萬有を支配して居る。而して基督が説いた愛の敎、四海同胞の意識、人は悉く罪障が深いといふ確信、此罪深き人類が基督に依て救済するといふ信仰等が此人間中心觀と結付いて、此世界の眞の形而上學的内容は墮落及び救済の歴史に存する、從つて又た、

救済の完成と共に此世界の意義は全然なくなるといふ思想を導起した。斯くて希臘思想の有力であつた永遠の自然過程の思想に代つて、墮落を以て始まり救済を以て終る一度切りの世界史劇が基督教的形而上學の内容とすに至つた。而して基督の偉大なる人格の力が信者の心に異常の印象を與へた結果、基督の出現をば此世界史劇の大轉回點と見之に依て神と之に背いた人類との融解の端が開かれ、之に依て善惡、明暗の爭が決せらるゝと見らるゝに至つた。

然るに此基督の出現に依て克服さるべき惡の中には他の宗教、若くは他の宗教の神がある。「ゲノーシス派」の思想家は一部は此後者中に猶太教若くは猶太教の造物主をも數へて居り、他の一部は猶太教の造物主をば基督教の至上神に従屬せしめて居る併し兎に角新舊兩約の神を同一視せざる點に於ては此派は一致して居る。之に反して兩者を同視したのは正統的基督教思想家である。併し之を同視する結果として同一の神が何故に新舊兩約に於て啓示を異にするかといふ疑問問題が起る。此問題に答へんとして出でたものが、パウロの書翰中の語（加拉太書三ノ二四）の暗不に基いて起つた。凡ての史的啓示は神の教育的方便であるといふ思想である。之を縁として、全世界史をば人類の試練と救済を目的とした神の教育設備と見て其起原、發展跡

趣を考査する種々の歴史哲學說が現はれた。是等の歴史哲學說は第二世紀頃よりして盛に現はれて居る（イレナイオスは此時期に於ける最よき代表者である）が、併し其れが最整頓した最精細な、最明確な形を取て現はれたのはアウグステイヌスに於てである。而してアウグステイヌスの歴史哲學は其特有なる宿命說を出發點として教會の絕對救済權に裏書をなし、哲學上よりして之に天國の鍵を委託したものであつて、中世の實際生活に最重要な關係を有する。

當日講演場には濱田學士將來の遺蹟寫眞、エトルスキの遺物及び是等に關する書籍等を陳列せり。講演終了後有志晚餐會を催し午後十時散會せり。

讀史會

例會 昨年九月廿九日午後六時より學生集會場に於て開く。來會者喜田博士、西田講師、中村、今村學士、神浦、松野、古田、辰馬、牧、富森、下川、梅原の諸君なり。席上左の講演ありて十時散會す。

本邦古代の民族につきて

喜田、博士

近時農民の副業起りたれども、昔はかゝることはなかりき。農業以外のことは皆なこれ賤民のなせし所なり。而して賤民は本來皆異族なり。海部のことは小林庄次郎氏の説ける所、予も同説にて

即ち隼人系統なりと考ふ。而して、海部と彌生式土器との關係を

考ふるに、彌生式土器が悉く海部のものとは云ひ難けれども、海

部が彌生式土器を使用せしことは明なるが如し。越前の彌生式土

器を出す處よりは又玉の作りかけ出づ。このこと及び出雲玉作神

社にある遺物より考へて、少くとも玉作部は海部と同族なりしが

如し。古語拾遺によれば、玉作は忌部の率ゐる所なり。忌部は天

孫系統なれども、その下につきしものが天孫族なりしか否かは明

ならず。從來考古學者の調べしは古墳貝塚の類なりしが、近時彌

生式土器多く出づるにより研究せざるべからず。而して、薩摩大

隅邊にては石器時代の遺跡中より出で、越前にては鐵器時代遺跡

中より出で、大島小田原等にては石器時代遺跡中より出づ。依て

見れば、この土器を使用せし民族は石器時代より鐵器時代にまで

かけて居たりしものと思はる。また名古屋市熱田高藏神社附近の

貝塚につきて考ふるに、こは貝塚と彌生式の遺跡とは元來別々な

りしものを、いつかの時代に貝殻を埋めるために處々穴を掘りて

埋めし故、こゝにこの兩者が一緒にあらはるゝに至りしものなり

云々。

例會 十月十日午後六時より學生集會場に於て開く。内田、喜田

兩博士、西田講師、中村、今村學士、神浦、松野、古田、辰馬、

下川、富森、牧、桑原、鈴木の諸君來會す。席上左記三氏の講演

ありて十時散會す。

慈性の日記に就て

西、田、諱、師

この日記は江州愛知郡荒神山神社社司の家に傳はりしものにして
所傳には、慈性は天海僧正の弟子にして京都の尊勝院にありしが
江州大上郡安養寺にも長く住せり。安養寺は多賀神社の神宮寺な
りしかば、慈性は同社の興隆、井伊家との交渉につきて力を盡せ
り云ふ。安養寺には其墓現存す。尊勝院は青蓮院にあり。日記
によりて慈性の傳を考ふるに所傳は大體に於て正しきが如し。日
記の内容を見るに、元和三年三月には家康病を得て、天海は駿府に
説ありしことを載す。大阪落城に秀頼死せずと言ふ風説のありし
ことを察すべし。又元和二年三月には家康病を得て、天海は駿府に
行き、慈性も亦駿府に向ひしこと見ゆ。家康の臨終前後の記事を
初め、薨後天海崇傳の間に權現號に關し争ひの生ぜしなどを記せ
り。その他多賀神社、井伊家に關する記、近江と京都との交通
の状況を知る材料等あり。云々

琵琶湖の航路に就て

中、村、學、士

琵琶湖航路の發着點の京都に近きもの、中大切なる大津と坂本と
に就きて述ぶべし。大津は戰國の頃までは今の市街の南半は湖水
なりしが、天正十年秀吉の坂本城を移せし時より發達せり。坂本
は中世には甚だ榮に居たりしが、坂本城の移さるゝに及びて衰へ

たり。琵琶湖航行の文獻上最も古きは應神記に見ゆる歌なり。されどもそれよりも古く大和平野と北國との交通には利用せられとなるべし。その航路の變遷を見るに、三期に分つを待、第一期は上古より戰國時代に至るまでにて、その特徴は舟の出發點が坂本なりしことなり。(但し例外として大津山田間航行のこゝ關東往還記に見ゆ)即ち坂本——志那、坂本——奥島、坂本——筑摩、朝妻、坂本——鹽津、坂本——海津又は今津の航路あり。その他信仰によるものとしては石山、竹生島に行くものありき。第二期は徳川時代にして、この時は大津が盛となりて坂本が衰へたり。而して矢走の渡が有名なり。大津より鹽津、長濱等諸方面に航路ありしが、皆近江國輿地志略に委し。又信仰による航路も随分ありたり。第三期は明治時代にして、鐵道開けたるために、今までは全國の交通上の航路なりしものが近江國內の交通機關となれり近年益々衰退するの狀態なりしが、五六年前より遊覽用のものとして急に發達せり云々。

武者、修、行

下、川、潮、君

武者修行の起原として、國史大辭典に室町殿日記を引きて記載しあるはこれ室町日記の誤にして、此書は、伊勢貞丈の説によれば後世の作なり。思ふに、武者修行のことはこれらの諸書に云へるよりも古く起りしものにして、即ち應仁の亂より明應頃までに起

原を發し義輝以後徳川初期にかけて盛なりしが如し云々。
例會 十月廿七日午後六時より學生集會場に於て開く。來會者三浦博士、西田講師、中村學士、神浦、古田、辰馬、富森、下川、牧、鈴木、桑原、丹羽、藤田、梅原の諸君なり。三浦博士は九月以來朝鮮總督府の囑により朝鮮半島史編纂のため出張せられ居たりしが、去る二十三日歸京せられたるを以て、その講演を乞ふことせり。大要左の如し。十時半散會。

朝鮮、調査、談

三、浦、博、士

朝鮮に在りて主として調査せし所は昨年出張せし時につゞきて奎章閣に於ける日鮮關係史料なりしが、今回は又朝鮮の歴史地理についても調査を試みたり。朝鮮の地理書にては東國輿地勝覽最も完全なるものとせられ、その記事委しく體を得たれども、後世の編纂にして且古き沿革に至りては脱漏の點少からず。世宗の實錄の末尾に附せられ居る地理志こそは李氏朝鮮に於ける地理志の最もものなりと思惟し居りしに、圖らずもそれより一層古き地理志にして而も原本あるを知れり。これを調査するに、世宗七年各道に命じて地理書を撰して春秋館に奏出し史臣の參考とするの令あり。各道旨を承けて一時に編纂せしが如きも、今は他道のものは傳らずして、唯慶尚道のもののみ存せり。この地理志は睿宗の時續撰の命あり。かくて成りし續撰地理志も慶尙道のもののみ殘

れり。この地理志を見るに、その外形甚だ大にして且製本にも念を入れたり。内容は慶尙道のものなる故、その記事がすべての點に於て日本と何かの關係あり。殊に應永の外寇の後日本の朝鮮を侵す者少くなりし原因に就きては、朝鮮の記録には己亥東征の結果なりとあれども、こは事實を掩ひ觀察を誤れるものなること、この書によりて確め得べし。この地理書の正編はもと慶州府にありたるものなること序文によつて知らる云々。また今回史蹟調査の爲め旅行をなせしは僅に旬日を出でざりしが、南朝鮮にては金海に赴き、又釜山附近の開雲浦左水營址等を觀察せり。金海は往古の駕洛國にして任那日本府の所在地と稱せられ、この附近倭寇に關する傳説及び壬辰役の遺蹟も少からず。又北朝鮮にては平安南道の平壤附近龍江西二郡と開城とを旅行せり。平安南道は古昔樂浪郡の置かれし處にして、當時の遺蹟もあり、又高句麗時代の遺蹟もあり、就中發掘中なりし大同江面の古墳を見て得るもの多かりき。平壤は都城市廓の制を知るに最もよく、且この附近史蹟に富み、大城山城の如き模範的城址なり。開城にも亦滿月臺の宮址を始め觀るべき史蹟少からず云々。

例會 十一月十日午後六時より學生集會場に於て開く。來會者三浦博士、川島、中村、今村學士、座田、松野、下川、辰馬、牧、古田、藤田、鈴木、丹羽の諸君なり。座田君は丹波國水上郡の郡誌編纂

の囑を受け史料採訪の爲め出張せられ居たりしが恰も今歸京中なりしより來會せられたるなり。席上左の講演ありて十時半散會す

琵琶湖の海賊

松野 遼崇君

海上のその如く、琵琶湖にも湖上の往來開くると共に海賊を生じ、亂世に於て殊に跋扈せしが如し。今應仁亂の頃に於ける湖上の海賊に就て述べんに、此時代に於ては湖水の西岸堅田が彼等の根據地の一なりき。堅田は此湖の最狭隘部に位して彼等に取りて最も適當なる場所なり。當時京都より北陸地方に赴くには大津及坂本より舟に乘じ堅田を経て北航し海津に着し。それより敦賀方面に赴き、又鹽津其他にも寄航す。故に彼等は堅田に根據を置きて見張の舟を出して備へなき旅船を襲へり。應仁元年八月に五山の僧瑞仙、景三が京都の亂を避けて湖東の小倉貫澄の許に赴く際に、海賊に遇ひし記事京華集に見ゆ。此海賊は幕府の倉奉行の貨物を奪ひ人を殺せしを以て、應仁二年幕府は延曆寺に命じて堅田を征伐せしめ、三月廿四日之を降す。此時堅田側に堅田侍が加はり居りし如し。信長は堅田の船を利用して公事船となし、秀吉も之を用ゐ、坂本、大津の船と共に所謂百艘船を造りて公役に徵發せらるゝ船とせり。江州諸浦の中にも堅田が最も勢力ありしことは、江州諸浦總代堅田村より奉行へ出せし文書に、「江州諸浦廻船の義堅田村は諸浦のおや郷にて御座候故昔は堅田計にて荷物積申候

事」とあるにて知らる。秀吉の朝鮮征伐の際には、彼等は水軍となりて戦争に参加せし如く、秀吉が江州の觀音寺に興へし朱印狀には、「江州諸浦が、この事今度唐人可被召連候條云々」とあり。文祿元年の先發隊には水軍一萬釜山浦に向ひしなれば、此中には海賊も加はりしならん云々。

氷上郡史料採訪談

座田 達二君

氷上郡は舊幕時代には六萬石の郡にてそれが三十有餘の領主に分たれし故、現今に於ても村制を布くに種々の障礙あり。西南部は播磨の影響を受け、西北部は但馬の影響を受け、柏原以東は大阪の影響を受けること多く、山一つを越えて天田郡に入れば京都の影響多し。佐治川、由良川沿岸には特殊部落多し。これ海部に關係あるべし。今迄調査せる數村にては古文書は概して乏しく、帳簿には延寶の檢地帳、五人組帳、宗門改帳等あり。郡札類としては、天和五年五月の吉利支丹の制札と、明和七年の徒黨禁止の制札との外は明治初年のもの多し。金石文の最も古きは柏原の八幡宮にある康應元年卯月十六日の銘ある梵鐘なり。石のものにては小川村石龍寺の五輪は鎌倉時代のものなるが如く、小川村宇村森の瑠璃寺にも古きものあり。神社は式内十七、神体は神像又は佛像多し。寺院は禪宗徒に臨濟多く、特殊部落には眞宗あり。古墳は沼

貫村、小川村等に非常に多し。これこの古墳は圓墳と横穴式のものとあり。方向は地形によりて一定せざれども北向はなし。久下村の金屋にある十三塚は有名なれども果して古墳なるか否か明ならず。或は山伏に關聯あるものにはあらざるか。寺の寶物としては、應永堂茶羅の板木最も古く、石龍寺にある日本地圖は徳川初期のものなるべきか。建築物には柏原の八幡宮の社殿が特別保護建造物なり。住民の家屋は以前は草葺にて、入口が破風のある側にあり。内部の間取も略一定し居たりき。石器時代の遺物は沼貫村稻畑の大年神社境内の石斧、油利村の石鋸あり云々。

小濱史料採訪談

三浦 博士

昨年八月、小濱に遊んで同地及び其附近の史料を調査したれば今その梗概を所藏者により分類して述ぶべし。小濱のことを書きたるものには從來知られ居るもの、外、拾遺雜話といふ隨筆体の書があり、こは木崎と云ふ町人の先代に正敏とて學を好む人ありたるが書きしものにて、參考とすべきこと多し。又羽賀寺年中行事は羽賀寺什物にして、年中行事に附するに戰國時代に小濱より京都邊までの出來事の見聞集を以てせるものなるが、此部分にも史料とすべき記事多し。酒井家別邸に山田吉令といふ人の一生の間に抄寫せる無慮千冊の寫本を藏したるが亦小濱藩に關するもの少からず、小濱を研究するものに取ては裨益するところ多し。小濱

には士分の舊家の残れるは稀れなるも、町人階級には多く、小港の繁榮が中繼港たるにありし爲め、是等の舊家は概れ其必要なる機關として發達せる船間屋の後なり。而して組屋氏は其隨一なるがその文書を見れば後に廢せし古關木下など云ふ家もありしこと知らる。其他、長井、田中、桑村、古川、志水、木崎、吹田、村田等の諸氏ありて、海運、商業、貿易等に關する各種の參考史料を傳ふ。是等諸家は祖先の武門に出でしもの多し。古川氏には、伴信友の手澤本を多く藏す。神社には小濱八幡宮あり。寺院には發心寺、高成寺、常高寺ありて、發心寺には日本圖と世界圖との屏風ありて河村氏所藏のもの併せ看るべく、又同寺には武田元光、常高寺には淀君の妹淺井氏の畫像あり云々。

第七回創立記念大會 十二月九日學生集會場に於て公開し、講演及び史料陳列をなせり。陳列品の重なるものは、去る八月中三浦博士の、阿井縣史編纂顧問として採訪せられし、小濱港關係史料にして、多く同地の舊家社寺等の所藏にかゝるものなり。第一、區を地圖とし、若狹敦賀圖、小濱港圖、小濱城圖、若狹小濱湖見之圖、西津古圖あり。第二、區を沿革一般とし、若狹郡縣志、拾権雜話等あり。第三、區を鎌倉時代とし、西津庄年貢注進狀あり。第四、區を足利時代の外國貿易とし、圖書編、海東諸國記、若狹國稅所今富名領主代々次第、呂宋壺賣渡代金皆濟狀あり。第五、區を戰國

時代の小濱とし、羽賀寺年中行事あり。第六、區を豐臣時代の小濱とし、其一、豐臣氏文書には豐臣秀吉朱印及豐臣秀次判物あり。其二、町人の祖先には武田信玄感狀、武田義統感狀、武田元光知行宛行狀あり。其三、市區の改正には京極家々臣連署狀、魚屋町定あり。其四、商人の特典には津川内記外二名連署狀、京極忠尚免許狀二通あり。其五、商業には淺野長吉皆濟狀、組屋源四郎覺書、淺野長吉書狀、抱疇守略緣起あり。其六、商人の公役勤務には淺野長吉下知狀、淺野長吉覺書あり。第七、區を徳川時代の小濱とし、其一、船間屋には雲濱經鑑、松前蝦夷地圖、爲替手形、延寶仕切御荷預り手形、秋田拂米御懸組規定、天保五年覺書、金子預り手形、浦々高札、嶋源定書、妙龍丸賣券あり。其二、若狹昆布商には天目屋舊記、天目屋昆布通書あり。其三、酒商には酒造大意あり。其四、鹽商には藤田氏舊記あり。其五、町人の特典には酒井忠直判物、組合頭甚之丞申狀あり。其六、小濱の交通には小濱舊藩要鑑あり。其七、町税には小濱心得草あり。其八、衰頹には組屋家傳あり。其九、風俗には若狹國風俗、雲濱旅館漫筆あり。其十、社寺には小濱社寺起立書あり。第八、區には京極高次室(淀君妹)畫像、大成禪寺曾要記、武田系圖、武田元光畫像二軸、武田元光懷紙あり。以上の外に講演、關係史料として陳列せられしものに、朝鮮普州義嚴寺跋碑銘拓本、慶尚道地理志寫眞、日本回

答使行中日記、世界圖屏風寫真等ありき。

講演は午後一時より晝之部を開き、桑原君開會を宣し、それより下川君は「兵法修訂の變遷」について、所謂兵法修訂が武者修行を意味することより、期を徳川以前と徳川以後とに分ちて前後の變遷を詳細に述べ、次に、古田君は「古學研究の先驅」について、古學には二つの意味あるも、こゝに述ぶるは國學と殆んど意同じなりとて、その研究の發達を調ぶることの日本史學史上重要なることより、古學研究の先驅者として戸田茂睡、下河邊長流、僧契沖の三人を挙げ、それらの人々の重なる著書に就きて注意すべき點を列舉し、次に、牧野君は「世界圖屏風に就て」先づ我國に現存せる世界圖屏風六種を挙げ、それらが皆同一傳統のものにしてその製作の裝飾的なることより、この圖の原圖となりしものは、利瑪竇の坤輿萬國地圖と航海圖となりしことを説き、殊に發心寺藏及び河村氏藏の二圖に就きて委しく述べ、最後にこの圖の製作年代を種々の方面より考證して豊公の朝鮮征伐の後鎖國の前後なりと斷定せられ、次に、西田學士は「平安朝の文化と庶民階級」について文化を其造作者と之れを享受するものとを區別するの要を説き、平安朝の庶民階級が如何に文化を享受せしかに就きて、政治に於ては農本主義、學問其他趣味に於ては、社會生活に伴ふ模倣性の影響を述べ、殊に宗教に於ては最も重要なりとて、當時

民衆と宗教との交渉多かりしこと及びそれには個人主義的色彩の出づるに至りしことを論じ、次に、喜田博士は「武士」について先づ續日本紀等に據り武士の意義を説明せられ、次に日本に於ては古より武士としては隼人、蝦夷の如き夷人又は東人の如き夷人系統のものを有る或は秦漢人等の外國人を有るたことを神話傳說及び記錄の上より論證せられ、尙ほ夷三郎と云ふことにつきもさは夷が大國主神にて三郎が事代主神なりしこと及びそれが始めより福の神にはあらざりしことにつきて述べられ、次に陳列品につきて三浦博士の説明ありて晝之部を終り、休憩、會員の晚餐會を催せり。

午後七時より更に夜之部を開き、川島學士は「煙草の傳來に就て」について、先づその研究の史料を舉げ、傳來の年代、傳播の狀態及び喫煙禁止令、移植せられし地方等を述べ、煙草が最も早く平戸に於て栽培せられしなるべしと推斷したり。次に、三浦博士は「朝鮮の倭寇」について、朝鮮の倭寇は由來久しきも、麗末最も盛にして李氏朝鮮の世宗の初までつゞきしが、その後頗る減退せる原因につき朝鮮側にも日本側にも種々の説あれども、其の何れも首肯し難きことより、其世宗の元年對馬より兵を班せる後朝鮮軍が日本軍に接したる經驗に基き制限的懷柔策と攻撃的防禦との二策に出で、殊に水陸の防禦を嚴にしたることによることを實錄

及び慶尙道地理志その他種々の史料により論證し、最後に倭寇は國史上汚點を印するものなれども、その發展的なりしことは後世に影響する所大なりしことより、倭寇研究の態度に及ばれ、次に内田博士は「三百年前日本と臺灣との經濟的關係に就きて」先づ臺灣を高砂と呼びし由來につき伊能嘉矩氏の説を擧げ、大體はこれに従ふも細かき點に於ては少しく所見を異にすきて、臺灣南部の打狗山が北部の基隆山と共に先づ航海者の眼につく高山なりしより、早く我が渡航者の標的となりしなるべきことを注意せられ、次に三百年前邦人が臺灣に赴きし目的は第一に他地に往く途中寄港地たりしこと、第二に臺灣に産する麻皮及び砂糖等を得んがためなりしことの外に、第三に臺灣に支那人、和蘭人居住し、これらと貿易せんがためなりしなりしことを觀音寺文書等を引きて述べられ、最後に、丹羽君の閉會の辭ありて閉會せしは午後十時なりき。此日熊本總長を始め、原、桑原、新村、藤井(乙)田邊の諸教授、矢野野田助教、多田講師等を始め、百五十名以上の來會者ありたり。

支那學會

昨年十月廿七日文科大學第九教室に開く平、内房、次郎氏は雲南亂匪事件に就て題し氏が雲南に滞在中遭遇せし騷動を詳密に述べられたり次に狩野博士は前に發表したる研究の連續として「軍の話」

をせられたり、

大會 十二月十日午前九時より京都帝國大學學生集會場にて第三回公開講演會を開く、文學士本、田成之氏は「章炳麟」と題し章氏の學説を紹介論評し、文學博士桑原、藏氏は「支那學研究者の任務」の題下に歐米の東洋學者が必ずしも専門家として最初より立脚せず、公務の餘暇よく不朽の研究をなすの賞賛すべきを論じ、Richthofen, Rockhill, Hirth等各氏の支那學研究の端緒並に其の研究態度の邦人の學ぶべき點多きを紹介し、支那の里數の研究、一世を約三十年とする説の研究等の例證を擧げて、日本人にして支那學を研究する人々に警告を與ふる所あり、西村時彦氏は「吳汝綸」と題して明治三十五年、初對面の時の印象より説き起し、吳氏が學殖の義理、考證、文章の三方面にそれ、卓越せるも、特に同治四年に廿六歳にて進士及第せしなど、幼より古學に志し、桐城の古學派として錚々たることを論證せらる、時に午後〇時三十分、一同休憩、會員並に有志者の會食あり、午後一時半後の部に移り、文學士法學士小島祐馬氏は「廖平」と題して廖平の留歷を紹介し、其の學説の變遷を四様に別ち、(一)は強則今古學時代にして孔子壯年古學を學び、晚年今學を學びしと云ふ故孔子の時代より今古の別明なりし故今日混淆せる今古學を甄別せざるべからざるを説きしが、次で(二)專主今學時代に入

り、劉歆以前に古學無しと云ふ説を主張し、西漢以前は皆今學譬へば公羊、穀梁、儀禮、左傳、國語等今學なれば古學は排すべしとし、次に(三)唱道大小學時代となり、孔子は支那のみならず、

世界の爲に考を立てしなりと考へ、周禮の周はあまねしとの意にて、周代の意にあらず、世界的禮なりと評し、晩年(四)唱道天人學時代に入りし廖氏の學說の變遷を述ぶ、次に文學博士内藤虎次郎氏は湘潭の人「王陽運」の經歷出身より説き起し、其の學は十一經に通じ、各注あるを紹介し、湖南の學なる王船山、唐鑑等を挙げ、學說の主要なる部分を論評し、王氏が自ら諸子、史、は失學者の學なりと云へるも、寧ろ王氏一生の長所は歴史方面にあるべく、其の名著湘軍志の名は永久忘れられざるべしと評せらる。

次に、文學博士狩野直喜氏は「皮錫瑞」と題し、皮氏が經學無論の表目の既に公羊派の特徴を示せる事、其の著書に不朽の名著ある事等より當今の學風を論じ、最後には氏の長所として(一)組織的研究をなせる事、(二)統括的才能ある事、(三)他の公羊學者の如く奇辭ならざる事、(四)今文派を唱へながら鄭玄などの説をも研究して態度の公平なる事、(五)詩文の點は王國運には及ばざるも廖平なごよりは遙に勝れ、特に駢文も巧なりし事を論議せられたり、最後に富岡謙貳氏は「名伶譚鑫培」と題し、支那現代の劇の様子を述べ、蓄音機を使用して譚鑫培以下兩三名伶の聲色を紹介

せられたり。此日會する者京阪神名古屋等よりし無慮百三十名なりき。

西洋史讀書會

例會 新學年に於ける第一回の會合は十一月一日午後六時半より學生集會場に於て開かれ、原、阪日兩教授及び學生十數名出席し左の紹介ありたり。

キツチナール元帥に就て

竹林 熊彦君

「現代評論」六月號に載せられたるモッド大佐の論文にして、元帥が北海に悲壯なる死を遂げたる後公にせられたるものなり、こは其の傳記を述べしものにあらずして英國が國民對生存競争に際して絶大なる武力を發展させ且この重大なる責務に當るべき人物として元帥を論じたるものなり「英國の眞に要求するものは民衆の指導者にあらずして、民衆を理解する代表者にあり」の一句を引いて、ナポレオンとクロンカエルの差別を述べたることより説き起し、英國氏は生長したる國民にして創造せられたる國民にあらずされば彼等は輿論を創造する人を求めずして多數のものが昔より受け傳へたる傳統を適當に表現する人を求む。即ち何事が困難の起る場合に彼等の叫び聲は其の希望を云ひ現はし得る人を求むるものなり。キツチナールの出身なるチャタム陸軍工兵學校は大ナボ

レオン戦争の勇士パスレーの創立せる所にして世界唯一の陸軍大學と稱すべく、幾多の卓越せる俊傑と指揮統率の天才を産せり。大は英・獨、佛の教育制度を比較し、英國人は本能的に運命の寵兒として世界を支配する爲めに來りしもの、如く考へ居れり。なほ、これを以てキツチナーの完成せる事業の重大なる要素をなすものなりと論じ、キツチナーの事業はかの荆棘を切り開き行く開拓者の如くにして、特に新聞社會より其の峻嚴なる檢閲に對して攻撃をなすものを生じ、更に戦争の繼續するにつれて此種の攻撃の機會は更に増加せるやも知るべからず、而も彼の悲劇的の死はチルソンのそれと等しく極めて幸福の事なりき。彼の名は永久に人の記憶に残り、彼の成功せる生涯は榮冠を加へられ、彼は義務を遂行したるもの、行くべき安息に入りしなり。誰か彼以上の幸福に際會するを期待せんやと記せり。

例會 十一月十五日午後六時半學生集會場に於て開會、次の紹介ありたり。

法王アレキサンダー六世、西葡兩國の海上植民、領境界決定、牧、健、二君、

こは米國史學評論に掲げられし Vander Linden 氏の研究にして凡ての外交史を通じて、法王アレキサンダー六世のスペイン植民地膨脹に關する勅令程、學界に問題を提供する文書は他に其の例

なからむとて主として此の問題に關する四箇の勅令の關係並に由來を説き、以て法王アレキサンダー六世の立場を闡明せんと試みたるもの也。四箇の關係勅令とは、一四九三年五月三日付の二勅令、五月四日付の第二のもの、及び九月廿六日付を云ふ。

先づ此等勅令の性質を攻究するに、此等文書は、法士の書狀の形式なること、又其の目的はスペインに對する偏頗なる好愛に基づく勅許にして王法の判決といふが如きものに非ざることを述べたり。次に四勅令の由來を説きたるが、これ本篇の主眼にして甚だ卓拔の論たり。其の第一段には、法王とスペイン王との當時に於ける密接なる關係よりして、會々此年の四月の末法王がスペインに不利なるミラノハニス同盟に加はりたるは、スペイン王が其の頃發見せられたる大西洋上の島々の贈與を法王に依頼するの好機を興へ、法王も亦王の此の希望に盲從せざる可からざるの窮境に在りしを明かにせり。而して其の第二段には、コロンブスの再度の探險が南方大西洋に行はれんとするに當り、彼の提案に依り第一の勅許を修正して、第二の勅許を爲さしめ、此に依りて「西方及び南方に於て」既に發見せられ又は將來發見さるべき島嶼陸地をスペインの王に興ふべきを定められたるを説き、なほ九月に入りては、コロンブスが更に東方に發見を行はんとせるより、再び修正を乞ひ、九月廿六日の勅令にはスペインの勢力圏を東方及び印

度の地方にも擴大するに至りたる次第を明かにせり。而して最後にの法王の專横なる裁斷に基づく外交上問題は、西葡兩國の協議に依り初めて和解を來すに至りたることを附記せり。此を要するに本論文の要旨は、(一)境界決の勅令は絶對的にスペインに偏頗なる勅許たること、(二)境界線の提案者はコロンプスなること、(三)西葡兩國の軋轢は此の勅令の爲に却つて増大せられたるものにて、法王の行爲が植民政策上兩國の利害を調和し平和を維持せむとせし積極的の平渉にはあらで、法王は全然スペイン王の道具たりしことを明かにせるにあり。

二、平の後

菅原 靈君

本年八月のツウクンフト誌上に見えたるマキシミアン、ハルデン氏の論文にして三部に分たる、

第一部はゲルマンの英雄傳説を列挙しあるも、その趣旨は古代ゲルマン人間の悲惨なる闘争を記載して現時の戦争の慘憺たる光景を想起せしめんとするにあり、

第二部は現時の歐洲戦亂の起原にして戦亂勃發當時の外交事情を詳記せり、

第三部は戦亂後二年間、露、佛、英等の國民がこの戦争に對する態度を記したるものにして、而して各自の國民性の顯れとも稱すべき二三を暗示せり。

先、露國は酒精禁止の法令によりて國民一般に謹嚴の態度に出で同時に生産力、企業熟の増加を來したり、佛國にありては輕佻なる素人戰術家の無責任なる批評は時に作戦上の妨害たりしこと少からず、シヨツフル、カステルナウ以下の名將軍も彼等の漫罵に苦みつゝあり、英國は先、物價を一定し、物資を豊富にし而して獨乙の貿易に對しては百方之を杜絶せんことを計れり、これ獨乙にざりては由々數一大事といはざるを得ず、云々、而してこゝに注意すべきは社會主義者に屬する論者の力説する獨乙國民の使命也、彼等獨乙社會主義者の一般見解をも窺知しうべき也、

即ちハルデン氏曰く、神は地球分配の當時に於て更に大なる土地更に豊穡なる土地を我がゲルマン人に與へざりしことを悔いるなるべし、而して、今やこの分配の状況に變化起らんを、故に神もこの變化を嘉賞せらるゝならん、されど吾人は未、その目的を達するを得ず、今回の戦争たる、敗者が一州を割き、又は一塊の黄金を拵けて終結すべき性質のものにはあらず、根限り、力限り敵味方共に國家の存亡を賭してその最後まで戦ふもの也、來るべき平和は敵の三強國中少くともその一國が勢力を失墜し彼等の同卵破れかくて獨乙の意のまゝに屈從するを前提とすべきもの也、然れどもかゝる平和は尙來らず、吾人は未其目的を達せず、故に

獨乙人は先共心戮力し、軍隊をして後顧の憂なからしめ、捷報の中絶に對しても悲まず、陰忍持久、最後の目的を達し、吾人の使命を果さるべからず云々、

地理學研究會

京都盆地四近の調査 昨夏以來地理學科教官の海外出張により例會又は談話會を開くの機少なかりしかば其間田中學士、下田、勝田伏見大塚藤田等數君は十月一日には大原谷へ、同八日には比叡連峯へ同十五日には愛宕山へ、同二十八日には鞍馬及び貴船へ、十一月十二日には高尾谷へそれ／＼遠足を試み、主として地質地形等の調査をなし、本會の繼續事業たる京都盆地四近の地誌の材料を蒐集したり。

談話會 石橋助教は九月下旬南洋方面より、小川教授は十一月中旬支那遼東山東方面よりそれ／＼無事歸朝したれば其歡迎を兼ね其旅行談を聞くべく、十一月三十日午後五時より東三本木あづまや階上に開催せり、會するもの兩氏を初め、學生卒業生等十數名、會食中は小川教授等の十一月二十六日の神戸附近の地震被害地域視察談等あり、宴を撤して後石橋助教のフイリッピン諸島及び蘭領印度巡遊談及び小川教授の朝鮮、滿洲、山東旅行談あり其内容は本欄別項に記せるが如し

小川博士の支那旅行 南滿洲及び山東省地方の地質地形等踏究の

目的を以て有、高、文、學、士、を隨へ、昨年八月下旬に出發し、朝鮮遼東の各地を視察しつゝ、北京に出で、津浦線により青島に至り山東鐵道沿線の調査を終へ十一月中旬無事歸朝したり。其間遼東山東兩半島地貌の基礎をなす古期岩層(支那層)に就きて層位上の比較研究をなし前地に於ては金州の北復州の西南娘々宮、瓦房店、煙台炭坑等にてカムブリア紀の化石を含む岩層より莫大の化石を獲殊に娘々宮よりは支那大車一輛に積みて大連に送りし程にて遼東に於ける化石採集として空前のレコードなりき後地に於ても之と同一の岩層が泰山片麻岩層の北側に廣大なる臺地狀山岳をなすものあり、此附近の博山張夏等にて多量の同期化石を獲たり、其中には頭足完備せる三葉蟲もありて煙臺炭坑の如きは完全なる同化石產地として世界無類ならんといふ。又山東にては我が占領に歸せる炭田及び鐵鋼床の研究は目下の一問題にして此方面にても炭田の分布區域、地質構造、岩層可採炭量、推定炭量、探礦開發を要する鑛區、鐵鋼床に關する各方面の調査を行へり。次に考古學上の探究も頗る好結果にて有高學士の發掘せる金州城外高麗古墳よりは浮彫ある高麗燒磁器と共に完全なる頭蓋骨を發掘したり、遼東半島出土の高麗燒は従來少なからざるも其埋葬狀態を完全に知り得たるは恐らく今回を以て嚆矢とすべし、山東省に於ても章邱縣博平(三國魏朝の古邑)近傍より珍しき土器出土の現狀を視察

し、其等の黄土中の埋没状態を確知せり、此附近には又唐代の古鏡磁器等も多く發見せらる、尙北京滯在中には石佛其他面白き考古學上の參考品を得又歴史地理學等に關する珍書をも少からず蒐集したり。南滿洲鐵道會社關東都督府並に山東守備隊等にて此等の踏究に對して案内其他採集品輸送等種々の便宜を計りし爲め調査作業等頗る好都合にて齎し歸れる各種の標本圖書類實に十八箱に達し何れも學術上重要な材料に當み目下それ／＼整理中なりと。

因に博士は其調査を完成すべく再び舊臘二十日北京及び山東へ向けて出發せり

石碣助教授の馬來半島旅行 七月下旬フイリツピン群島に向ひマニラを根據地としてルソン島内を巡りマニラ麻、甘蔗畑ロスバノス溫泉等を視察し其れより英領北ボルネオに轉じてサンダカン附近にて製材及びカツチの製造状況を視同島北西岸に沿ひバンカ、ビリトンの間を経てバタヴィアに赴きジャバ島の内地ホイテンゾルグ、バンドン、ジョツクツヤ、ソロ等を歴訪し此間に著名の佛蹟ホロブドールを尋れ、スラバヤの東バツスルアンの糖苗試驗場を觀グリツセの同教本山に賽し、更にスマランより蘭領セレベス島のマカツサルに航し住民の状態を調査し次で蘭領ボルネオのバリツパバンに至りボルネオ石油工場、世界第一のバラフィン工場

を視察して終に香港に直航し滯在五日諸種の調査を終へ澳門行は颶風の爲め中止して九月末無事歸朝したり。本旅行の主目的は群島の經濟地理的研究にあるも尙殖民地住民の生活狀態に就きても注目を怠らずフイリツピンに於てはマニラにプリンチンガガフィス等の學究的設備理想外に開け住民の生活程度進み今や殆んど自治制を施すも差支なきまでに至れること、ルソン土人の有力者間には近時バンオリエントの思創盛にして東洋人が團結して西洋人に抵抗する念あるを知れり、米政府は凡ての點に於て本島を永久に占有する意思なきもの、如く米人の所有せる土地の多くはなるべく賣却に力めつゝあり、次に英領北ボルネオ會社の財政は近時困難を極め其土地を日本人に賣却するもの少からず邦人の資本的發展期して待つべきこと、又ジャバ島は蘭政府の政策が力めて住民を愚にする方針を取りしめ爲め從來比較的平穩なりしも最近には土人も次第に自覺して政府に反抗せんとする氣勢を示しつゝあり、唯從來農事の研究を除き教育的施設を忽にせしかば學術上の成績は殆んど見るべきものなく文化の發達極めて遅々たるはフイリツピン地方と著しく相違せる點なり云々、

京都大學山岳會

京都大學々友會運動部内の同會は登山具物を目的とせずして、山岳に關する學術的研究にも留意し昨年は學内の地質學者地理學者

井に日本及び歐洲アルプス登山者を聘して學術講演を開くこと二回に及びしが、毎日曜に行ふ近畿地方の山岳登攀にも其等の指導を受けつゝあり。昨年に於ける本會の概況左の如し。

日本アルプス踏破 七月十五日より松本に集合し中房より燕岳、大天井岳、常念岳に登り二ノ俣より鎗ヶ嶽に登り上高地に出て更に燒ヶ嶽穗高嶽に登り二十三日松本にて解散。

比良登山 十一月十二日前十時八日山を経て午後二時半比良頂上に登り同じ道より八時大津に歸着。

生駒登山 十二月三日九時京阪電車により出發壹島より四條畷神社に参拜し野崎觀音石切神社を経て山頂に達し同じ道にて下山す

福井縣史編纂概況

福井縣にては大正四年十一月大典記念として縣史編纂の議を決し翌年四月より、内務部長松村才知氏を編纂委員長とし各課長其委員となり、編纂は主として牧野信之助氏はに當り、芳賀、三浦、兩文學博士に顧問を囑託し、又東京藤田伊人氏、京都中村直勝氏並びに縣内兩三氏に編纂事務を囑託し、福井、小濱以下各藩の故老は別に協議員の名目の下に諮問に應ずることとし先づ史料の蒐集に着手せり、縣史編纂の主たる目的は古來の民政沿革を細叙して施政の參考に資せんとするにあり、其細目は未だ充分に之を定むるに至らざるも大略藩政以前、藩政時代縣治時代の三期に分ち

前二期は編纂員の手にて後一期は廳内各課にて之をまゐめ、最後に編纂員之が統一を取る計畫なり、史料は先づ主として藩政以前のものゝ蒐集するに力め、特に八月小濱及びその附近に於ける採訪の際には、顧問三浦博士の指導の下に、頗る豊富なる史料を蒐集するを得たり、左に一括して四月以降十一月末日迄の期間に於ける蒐集史料の中主要なるものを列擧すべし。

馬來田文書、橘文書及記録、山本文書、心月寺文書三崎文書、太月文書等(福井市)

森田文書、燕江文書、福明寺文書、齋藤文書、大連文書十郷用水書類等(坂井郡)

寶鏡寺文書洞雲寺文書、稱名寺文書、洪泉寺文書等(大野郡)

越知文書及記録、織田文書及記録、雲寺文書、光寺文書、山本編書主(丹生郡)

三田村文書、山森文書(今立郡)

大鹽文書、西野文書(南條郡)

敦賀郡古文書集(敦賀郡)

大音文書、渡邊文書、須藤文書等(三方郡)

組屋文書、羽賀寺文書及記録、長井文書、桑村文書等(瀨越郡)

飯盛寺文書、大成寺文書等(大飯郡)

以上の中には明治三十年史料編纂掛の採訪に係るものなきにあら

ざるも、多数は新發見に係れり、この外諸卷、屏風圖、地圖、發掘品、武器等に頗る優秀參考となるもの數十點あり、猶大正六年度には採訪を連續して各藩邸につき藩政代の史料を蒐集し、併せて史蹟の實地踏査を行はんとす、幸に同年度より別に史蹟勝地調査保存會の設定せらるゝこととなりたれば、縣史の編纂はこれと相待ちて事業の進捗を期せんす。（牧野信之助氏報）

伊賀史談會

伊賀史談會伊賀史談會は數年前より同國に於ける史蹟の表彰、郷土史の闡明を目的として起れるものにして、佐々木彌四郎、菊山種男、村治圓次郎の三氏主として事に當り、隨時に研究會を開きて會員各自の研究を發見し、また史蹟の實地調査を行ひ、去る大正四年八月の如きは佐々木氏を講師として國內各地に臨時講演を試み大に史蹟に關する知識を地方人士に與へたりまた同會にては明治四十五年より毎年一回國內の遺蹟・遺物・古文書・古記録の繪葉書を發行して會員に分つと共に、世の同趣味者に寄贈して之を國外に紹介することに務め、一昨年よりは伊賀史談會誌なる小月刊雜誌を發行して研究を載せたり（現時は休刊）。今や會員は國內各地に亘りて多数に上り健全なる發達をなしつつあり（村治圓次郎氏報）

會 報

例會 昨年十月廿一日午後一時より文科大學第九教室にて例會を開き文學士植村清之助君の「古ゲルマンの集團フンデルトシャフトに就いて」文學博士新村出君の「日本に於ける西洋藝術の源流」と題する講演あり、午後五時散會す。

總會 十一月廿六日京都帝國大學々生集會場にて本會第九回總會を開き、評議員の改選あり、次に講演に移り、文學士濱田耕作君の「エトラスキの遺跡と其の文化」文學博士朝永三十郎君の「希臘人の世界觀と中世人の世界觀」と題する講演あり、午後六時より右志晚餐會を催し盛會なりき。

史林編纂會 十一月九日文科大學陳列館にて第二卷第一號編纂會議を開き三浦評議員以下各編纂委員出席、十二月一日同じく同所にて開催 小川、桑原、三浦の三評議員以下各委員出席せり。

大正五年度會計報告

（大正五年十一月二十日現在）

収 入 之 部

金八百〇六圓四十錢七厘

收入總額

内 譯

第二卷 會報

第一號 一八四 (一八四)

金三十八圓七十一錢七厘
金六百八十二圓八十錢
金六十圓
金二十四圓八十九錢

支出之部

金七百二十四圓六十九錢

內譯

金一百十七圓二十四錢
金三百七十五圓九十二錢
金五十一圓五十錢
金二十六圓五十三錢五厘
金三十四圓二十三錢五厘
金二十圓五十錢五厘
金四十七圓
金十七圓
金六圓七十九錢五厘
金七圓
金十圓
金五圓七十六錢
金五圓十六錢

支出總額

前年度繰越金
會費收入
特別會計借入
講演集及史林資渡代

金百六十二圓五十六錢

現在額

會費領收報告 (振替貯金拂込のものに限る)

(大正五年十一月三十日迄に受領の分)

續史的研究購入費
史林購入費
原稿料
集會費
通信及發送費
集金費
謝儀及慰勞費
口繪寫真代
諸印刷費
原稿紙代
口座加入費
雜費
消耗品費

一 金一圓二十錢(大正五年分)
吉井 太郎 林 市左衛門 金内 五七
鴛淵 一 鹿島 吉平 澤田 藤十
白石 正邦 渡邊 轍 藤塚 鄰
石田 幹之助 上田 繁松 寺島 徳八郎
内田 清長 古賀 徳義 堀 正二
新 正助 濱田 廉 杉浦 隆次
磯谷 才次郎 澤田 章
一 金六十錢(大正五年上半年分)
一 同 (同 下半年分)
一 金一圓四錢(大正六年分但し十六錢前預り)
一 金一圓(大正五年上半年分但し二十五錢預り)
一 金二圓四十錢(大正五、六年分)

山 下 四郎
谷 森 饒男
酒 井 忠一
藤 田 鶴三
勅使河原健之助

(右紹介者 諸鹿央雄)

同 京城大和町一丁目官舎
同 京城旭町二丁目一〇

(右紹介者 黒井治徳)

兵庫縣武庫郡西宮町内社家町

(右紹介者 喜田貞吉)

東京市牛込區牛込辨天町一四七

(右紹介者 中村直勝)

東京市芝區三田四國町二ノ一

(右紹介者 新村出)

東京貴族院官舎

徳島縣美馬郡脇町

東京麹町區富士見町六丁目

東京市本郷區駒込曙町七

(右紹介者 三浦周行)

東京府下大森山王

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目

東京市牛込區砂土原町二ノ七

京都府官舎

京都市南禪寺町宇高岸

京都市小川通寺之内上ル

(右紹介者 原勝郎)

東京市麹町區紀尾井町九

大連市乃木町八

(右紹介者 濱田耕作)

松島 惇 東京市小石川區林町一九
山本 忠美 名古屋市中區上仲町二

吉井 太郎 名古屋市中區三輪町七八

(右紹介者 今西龍)

谷森 饒男 東京市麻布區我善坊二七

(右紹介者 桑原隲藏)

龜井 高孝 京都市河原町廣小路下、西入

(右紹介者 内藤虎次郎)

柳田 國男 福井縣敦賀町

笠井 新也 名古屋控訴院

松平 乘統 東京市本郷區根津西須賀町靜修館

金澤 庄三郎 奈良女子高等師範學校

大塚 武松 京都文科大學國史科

時野谷 常三郎 京都市室町今出川上ル

松井 等 東京市本郷區追分町三〇千代田館

木内 重四郎 同

(右紹介者 梅原末治)

北島 貞顯 京都法科大學經濟學研究會

千 嘉次 (右紹介者 本庄榮治郎)

池内 宏 東京市本郷區駒込神明町三六六

島村 孝三郎 (右紹介者)

島山 喜一

宮崎 御一郎

若山 善三郎

田中 萃一郎

小山 源治

河村 常造

尾佐 竹猛

上野 菊爾

森口 奈良吉

鈴木 登

神田 喜一郎

高松 清

齋藤 俊次

西 彦太郎

内藤 智秀